

## 信濃路にみる〈恋・愛〉のメモリ

## 或いは堀辰雄——〈看取り〉の結婚者——

竹内清己

## 序 夢の告げ、或いは論の発端

今は昔、昔ならぬ今、ここ、のお話をする。こことは信濃路の軽井沢・信濃追分、の堀辰雄が生涯を閉じた堀辰雄文学記念館、今は語るこの講演そのものである。

依頼を受けた翌日の夢は、習いの謡「井筒」の詞章で閉じた。

「まろがたけ 生ひにけらしな 老いにけるぞや さ  
ながら見みえし。昔男の。冠直衣ハ。女とも見えず。男なりけり。業平の面影 見ればなつかしや 我ながら懐かしや。  
亡婦魂ボオフハクレイの姿は凋シボめる花の。色なうて匂ひ。残りて在原の寺乃鐘もほのくくと。明くれば古寺の松風や芭蕉葉の夢も。破れて覚めにけり。夢は破れ明けにけり

後シテは紀の有常ノ娘、筒井筒の井筒の女となつて、業平の形見の直衣を被て序ノ舞をまう。「業平」は業平橋のほとりに育つた堀辰雄、

「亡婦魂ぼうふはくれい」は思う人の面影を偲ぶ多恵子夫人か。メモリからの「恋・愛」の日本文学、夢の告げ、目覚めは、表記の論題の発端となった。そうだ、夢の中の気づきは、かつて、「看取りのフィアンセ、あるいは青春の別れ—横光利一『春は馬車に乗って』と堀辰雄『風立ちぬ』に見る—」(二〇〇七・三)において、新感覚派の横光とこれを継ぐ新心理主義の堀の婚約者を失つた看取りを論じたものだった。その末尾に、病める人、病んで死にゆく人があれば看取る人がいる。「そしてそこには大変な疲労や葛藤やそういうものがあるわけでありませけれども、一つの文化の知恵として、あるいは近代を知ってしまった我々としては、そういうゆとりの場というものを、浪漫化に導かれながら、やはりそういうものをも可能にするような場というようなことを、考えていかなければならないと思います。……医療というものを使わなければならないけれども、精神の持ち方とか、あるいは人間の尊厳だとかいうようなことの道を、芸術表現は担つて、何らかのひつつの作品にしようのではないか。」と記したことだった。あれは福田真人『結核の文化史』などの示唆からの〈恋・愛〉のメモリだった。

そうだファイアンセ・婚約者であつて、節子を看取つた人は、やがて結婚者となつて、妻多恵に看取られて昇天した。これを信濃路の〈恋・愛〉のメモリとして語る、語るにふさわしい者として今私はあるのではないか、と。

すでに、『堀辰雄 人と文学』(二〇〇四・一二)で、堀の文学的生涯を、大正末期のモダニズム時代のI実験の人から、IV鎮魂の人一九三〇年代後半の信濃へ、愛する女性―結婚者―を語り、V回帰の人一九四〇年代前半の大和へ、ふるさとびと―大戦下―をくぐつて、VI新生の人一九四〇年代後半以降の戦後へ、夢は冬野を―と展望した。

結婚相手の妻多恵は、堀の鎮魂の人、回帰の人を共に生きて、新生の人の戦後に「豆自伝」(二九四九・一一)の末尾に「今私は信濃追分の仮寓にゐる。この浅間の麓で、病を養ふやうになつてから、既に五年の歳月を過し、又凍雪の冬を迎へようとしてゐる。」とある。共生の看取りを受ける人では、「わぎもこ」(一九五二・三・二三)に「もう足かけ九年、こんな信州の山のなかにこもつて、何ひとつ厭な顔をせず、寝たつきりの、めんだうな私のおつきあひをして貰つてゐるのは、なんともありがたいことだ。」と書き閉じた。「おつきあい」の看取りは、すでに「ありがたい」ことで、有難い―そう有ることなかなか難しい―という原義において、それは恋、恋いであり愛なのだ、と。

## 一、信濃路

信濃路は古代からの山路分け行く交通路であり、歌枕として多くうた(歌・唄・謡・詠)われてきた。近現代文学も、ここに分け入りこをうたつてゐる。「古事記」のヤマトタケルの東征の旅も、筑波嶺に到つて帰路につき、「その国より科野しなのの国に越えて、すなはち科野の坂の神を言向けて、尾張の国に還り来て」と記される。「万葉集」には、

信濃道は今の攀り道刈りばねに足踏ましなむ杵はけ我が背

信濃なる千曲の川のさざれ石も君し踏みてば玉と拾はむ

日の暮れに碓氷の山を越ゆる日は背なのが袖もさやに振らしつ

ひなぐもり碓日の坂を越えしだに妹いもが恋しく忘れえぬかも

とうたわれ、「伊勢物語」の在原業平の東下りの途次、

浅間の嶽に、けぶりの立つを見て、

信濃なる浅間の嶽に立つけぶりをちこち人の見やはとがめぬ

とよんでいる。信濃―浅間―煙の連環は、遠く今、ここ、に到る伝承であつた。「更級日記」の冒頭「あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人」と書き出した少女の日記は、終いは京にあつて夫が信濃守として任地に赴くのを「親のをりよりたちかへりつつ見しあづま路よりは近きやうに聞こゆれば、いかがはせむに、ほどもなく下るべきことどもいそぐに」門出は八月十余日にす。(やがて

夫の死)「いと暗い夜、六郎にあたる甥の来たるに、めづらしうおぼえて、

月も出でて闇にくれたる姨捨になにとて今宵たづね来つらむ

とよむ。それは「古今集」読人しらずの

わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て

の本歌取りであつて、信濃の姨捨は月の名所の歌枕ともなった。

堀文学はまた、これにちなんだ小説、随筆を連ねることになる。

謡には、「柏崎」に、「今行く道は雪の下。」「山之内をも過ぎ行け

ば。袖冴え増さる旅衣。碓氷の峠うち過ぎて。越後に早く着きに行

り。急ぎ候程に。故郷柏崎に着きて候。」とある。「姨捨」の月の名近

き秋の姨捨、「木曾」「巴」「木賊」「紅葉狩」「富士太鼓」「雲林院」

「杜若」「望月」「山姥」など。松尾芭蕉「更科紀行」の

おもかけ  
倅や姨ひとりなく月の友

の句は、いうまでもなく姨捨、

吹き飛ばす石も浅間の野分かな

は、まさに、今、ここ浅間神社の句碑と拝まれる。

かつて堀の愛弟子中村真一郎は「文学の地理学」という一文を草し、国文学者風巻景次郎説の「日本文学の伝統と従来云われているものは、実は京都の風土に根ざしたもので、……もし首都が一時、信州にあったとしたなら、日本文学はもっと乾いた、もっと理窟っぽいものになり、自然描写もより非情緒的で、思想的哲学的要素の強いもの

になったろう。……それが特色になったかもしれない。」を引いている。一千年の古都、京都の湿気優艶の文化に対して信濃高原の明澄は、フランス文化に相通うことになる——と。信濃路のメモリ、堀のフランス文学愛好もさもありなんである。

『姨捨』(一九四〇・七)のラストシーン。「或晩秋の日、女は夫に従つて、さすがに父母に心を残して目に涙を溜めながら、京を離れて往つた。釋い頃多くの夢を小さい胸に抱いて東から上つて来たことのある逢坂の山を、女は二十年後に再び越えて往つた。「私の生涯はそれでも決して空しくはなかつた——女はそんな具合に目を赫やかせながら、ときどき京の方を振り向いてゐた。」

近江、美濃を過ぎて、幾日かの後には、信濃の守の一行はだんだん木深い信濃路へはひつて往つた。」と。

さらに最後の小説作品『ふるさとびと』(一九四三・二)で、冒頭の今、ここ「浅間根越の宿場の一つとしての、瓦解前の繁栄にひきかへ、今は吹きさらしの原野の中に、いかにも宿場らしい造りの、大きな二階建の家が漸く三十戸ほど散在してゐるきりだつた。……その少し先のところで、街道が二つに分かれ、一つは北国街道となりそのまま林のなかへ、もう一つは、遠く八ヶ岳の裾までひろがつてゐる佐久の平を見下ろしながら中山道となつて低くなつてゆく。そのあたりが、この村を印象ぶかいものにさせてゐる、「分去れ」である。」と書き出し、掉尾を「松平もそれきり黙つて、もうすつかり秋めいて

近かちか見える火の山の火口のあたりに小さな雲がたえず移つてゐるのを見やつてゐた。小さな雲がひとつづつ立ち去ると、そのあとに火の山の煙らしいものが一すぢ、かすかに立ちのぼつてゐた。……」と、自己の分身を油屋に逗留した画学生をして、火の山の煙の「風立ちぬ」ならぬ「立ち」に出逢わせている。

## 二 恋―愛

恋愛＝愛恋は、近代以降の連語であつて、この言葉の魅力は、つきない、喚起力をもつ。これを今一度、恋と愛に分ち、それぞれの魅力に目覚め、恋―愛とハイフンで結ぶ発想を、長らく私は追求してきた。大和言葉の、こい、はもともと魂乞い・恋にあると主張したのが堀の敬愛した釈道空＝折口信夫だつた。

恋―魂ごひ―乞ひ・恋ひ・恋し・懐かし・慕わし・忍ぶ・偲ぶ・焦がれる・恋心・恋慕　恋衣・恋枕・恋路・恋草・忍ぶ草・恋の縁・恋の淵・恋の証・恋の乱れ・恋の奴

愛―いとし・いたわし・めぐし・愛でる・哀れ・憐れ・愛情・愛欲・愛染・愛執・愛憐・愛慕・愛惜・慈愛・恩愛・寵愛・偏愛・貪愛・信愛、と表現は豊か。以下、

情―なさけ・恋情・純情・殉情・旅情・情事・情夫(婦)・情死、  
思―おもふ・思う・想う・念う・思慕・思春、好―好き・好む・好色・好意・愛好、色―いろ・色好み・色恋・色香・色情、懐―懐か

し・懐思・懐古・懐郷、憧―あこがれ・憧れ・憧憬、憬―憬れ、惚―惚れる・惚ける・うっとり、問―問う・妻(夫)問ひ・言問ひ、契―ちぎり・契る、切―大切・親切、待―待つ・待ち望む、最後に、結婚・約も恋愛用語であること。

これらをもつて、外国語のラブ・アモール・リーベ・エロス・フィリア・アガペー・カリタスの訳語となつた。……

「源氏物語」の色好みなどもはやたどらない。謡に、世阿弥作「松風」は、流され人の行平の寵をうけた須磨の海女松風・村雨の恋慕は、「思ひを乾さぬころかな」「変わらぬ色の松一本。緑の秋を残す事の哀れさよ。」とあり、車と結び、汐汲車・忍び車・恋車、草に結び、捨草・恋草・思ひ草、衣と結び、汐衣・汐焼衣・縑の衣・馴れ衣・恋衣、路に結び、汐路・恋路・関路・夢路・通ひ路を通り、侘ぶ・寂び・恨めし・懐かし・恥ずかしの心をあらわす。「思ひ内あれば。色外ほかに現れさむらふぞや。わくらはに問ふ人あらばの御物語。余りになつかしう候ひて。」とて、ときに執心・妄執・及ばぬ恋は、恋の責め苦・乱るる恋の淵に落ちることになる。

同じく「恋重荷」は、「我が君菊を御寵愛」の菊の下葉取りの賤しき莊司が、「忝くも女御の御姿を拝み申し。勿体なくも恋となりたる」に、「この荷を持ちて御庭を百度千度廻る」、「その間に御姿を拝ませ給ふべき」との約束、「これこそ恋の重荷よ。重荷なりとも遭ふまでの。恋の持夫にならうよ」とまわる、「総じて恋と申す事は。高き卑

しき隔てぬ事にて、「恋よ恋。我が中空になすな恋。恋には人の。死なぬものは」と恋死にする。謡の詞章に、

「重荷と云ふも。思ひなり」「浅間の煙。浅ましの身や。」「恋路の闇に迷ふとも。」「とこんなところにも、浅間の煙と恋路の闇を連結して、今ここ、の信濃路の〈恋・愛〉のメモリを刻んで歎ばせる。

近現代、例えば、

佐藤春夫

『同心草』「水辺月夜の歌」

せつなき恋をするゆゑに  
月かげさむく身にぞ沁む。

身をうたかたとおもふとも  
うたかたならじわが思ひ。

北原白秋

『水墨集』「落葉松」

からまつの林を過ぎて、  
からまつをしみじみ見き。  
からまつはさびしかりけり。  
たびゆくはさびしかりけり。  
からまつの林を出でて、

浅間嶺にけぶり立つ見つ。

浅間嶺にけぶり立つ見つ。

からまつのまたそのうへに。

立原道造

『萱草に寄す』「はじめてのものに」

いかな日にみねに灰の煙の立ち初めたか  
火の山の物語と……また幾夜さかは 果して夢に  
その夜習ったエリーザベトの物語を織つた

『優しき歌』「夢みたものは……」

夢みたものは ひとつの愛

ねがつたものは ひとつの幸福

それらはすべてここに ある と

と、例示にとどめる。堀は、

堀辰雄

『風立ちぬ』の冒頭をあげる。

それらの夏の日々、一面に薄の生ひ茂つた草原の中で、お前が立つたまま熱心に絵を描いてゐると、私はいつもその傍らの一本の白樺の木蔭に身を横たへてゐたものだつた。さうして夕方になつて、お前が仕事をすませて私のそばに来ると、それからしばらく私達は肩に手をかけ合つたまま、遙か彼方の、緑だけ茜色あかねを帯びた入道雲のむくむくした塊りに覆はれてゐる地平線を眺めやつ

てゐたものだつた。

そうして

風立ちぬ、いざ生きめやも。

ふと口を衝いて出て来たそんな詩句を、私は私に靠れてゐるお前の肩に手をかけながら、口の裡で繰り返してゐた。

と「序曲」が奏でられる。そうして眺めやつていた地平線の彼方の八ヶ岳の麓の結核療養所での「冬」の節子の看取りは、

私はそれから急に力が抜けてしまつたやうになつて、がつくりと膝を突いて、ベットの縁に顔を埋めた。さうしてそのままいつまでもびつたりとそれに顔を押しつけてゐた。病人の手が私の髪の毛を軽く撫でてゐるのを感じ出しながら……

部屋の中までもう薄暗くなつてゐた。

と閉じられる。看取る「私」の「顔」がベットの「縁」に押しつけられ、死にゆく病人の節子の「手」が、「私」の「髪」を撫でているその労りの構図を読み解いたことがあつた。(山石波「文学」)

また、その鎮魂曲ともいふべき終章の

或はひよつとしたら、それも矢つ張お前のためにはしてゐるのだが、それがそのままでもつて自分一人のためにしてゐるやうに自分に思はれる程、おれはおれに勿体ないほどのお前の愛に慣れ切つてしまつてゐるのだらうか。それ程、お前はおれに何んにも求めずに、おれを愛してゐて呉れたのだらうか？……

「死のかげの谷」の自己愛、他者愛の問いの厳しさを優しさについて苛烈にも「支配の構造」と副題して、根源的試練の裡をうかがつた私である。

ここで『堀辰雄事典』(二〇〇一・一一)の編者として、「対談 堀辰雄の文学と生活譜」の一コマを引用させていただく。

竹内・『山麓の四季』は、軽井沢追分地区の自然誌とでもいふべきもの、それから多恵子さんの育ちから掘り出しゆく。自ら女性像を編まれたといえる。ですから今後は堀辰雄研究の一つ独立した分野として考えてゆくべき多恵子研究となる。そうなってくる堀辰雄における女性譜的なものを問題の中で多恵子さんも相対の中にくみこまれることになる。

堀・それはあるかもしれませんね。いろいろの女性が周りに……。

ここで、これをなにか申し訳なかつた悔いのように、引き出した多恵子さんの言葉を反芻し、しかしさらに酷薄にも、堀の「女性譜」つまり恋愛譜をメモリとし提示する。

志気もの——甘栗・鼠・麦藁帽子・燃ゆる頬・顔・挿話・従姉・墓畔の家・幼年時代・花を持てる女・春浅き日に・行く春の記・豆自伝  
多恵子もの——七つの手紙・牧歌・山の日記・木の十字架・初秋の浅間・「美しかれ、悲しかれ」・四つ葉の首蓆・巢立ち・閑古鳥・ユウジニイ・ド・ゲラン(共訳)・朴の咲く頃・花晩夏・おもかげ・曠野・

大和路・信濃路・妻への手紙・我思故人・炉辺・豆自伝・追分より・近況・わざもこ

内海妙もの——清く寂しく・甘栗・麦藁帽子・顔・閑古鳥・山茶花  
片山広子・総子もの——多恵子『堀辰雄の周辺』の最後は、片山広子「辰雄があこがれ 尊敬した夫人」と題される。総子の項目はないが、宗瑛・死の素描・ルウベンスの偽画・聖家族・窓・恢復期・萩の花・美しい村・夏・暗い道・伊勢物語など。「更級日記」など・物語の女・菜穂子・楡の家・菜穂子覚書・ふるさとびと

綾子もの——美しい村・夏・暗い道・風立ちぬ・おもかげ・豆自伝  
加えて『堀辰雄の周辺』で女友達とした「辰雄が好意を寄せた女友達」佐多稲子と「親しい付き合いを続けた女友達／若い詩人たちのあこがれのひと」と題された中里恒子。

佐多稲子——不器用な天使・二人の友・「美しかれ、悲しかれ」  
中里恒子——閑古鳥・山茶花など

三 メモリー 四 堀辰雄 五 看取り 六 結婚者

講演題目からの三、四、五、六章をまとめて、以下『堀辰雄事典』の谷田昌平「訂補年譜」で簡略にたどる。

#### 綾子譜

綾子の登場は、一九三三・昭和八年、堀二十九歳。六月、軽井沢に

行き、つるや旅館に滞在。七月、胸を病み、軽井沢に来て、つるや旅館に滞在していた矢野綾子と知り合った。二人の交際の中、九月、これを反映した「美しい村——或は小遁走曲」「夏」を書き終えて、軽井沢より帰京。翌、一九三四・昭和九年三十歳、七月二日、軽井沢に行く。いったん帰京後の二六日に信濃追分に赴き、油屋旅館に秋まで滞在。綾子は、七月末より軽井沢に父が借りてくれた別荘で静養し、九月まで滞在。その間、堀は追分から綾子の許を何度か訪ねた。九月、八日、「物語の女」を脱稿。矢野綾子（明治四十四年九月十二日生まれ）と婚約。そうして二十日過ぎに、婚約者綾子の帰京に付添って、上京した。一九三五・昭和十年三十一歳、七月、胸を患っていた許嫁矢野綾子の病状が進み、自分の健康も思わしくないので、付き添って共に富士見の高原療養所に入院した。結果は十二月六日、矢野綾子死去、享年二十五歳だった。

綾子没後、一九三六・昭和十一年三十二歳、七月、軽井沢つるや旅館に逗留。八月、信濃追分に移り、油屋旅館に滞在。十月、「風立ちぬ」（「序曲」「風立ちぬ」）を書く。十一月、「冬」を執筆。十二月、終章は成功しなかった。「風立ちぬ」を「改造」に発表。

#### 多恵子譜

多恵子の登場の年は、一九三七・昭和十二年三十三歳。一月、前年暮れに東京に帰ったが、二日に戻る。（この年は大半を信濃追分で暮

らした。「冬」を「文芸春秋」に発表。四月、「婚約」（後「春」）を「新女苑」に。六月、初めて京都に旅した。『風立ちぬ』を新潮社より刊行。八月、この夏、静養のために弟の加藤俊彦と共に油屋旅館に滞在していた加藤多恵と知り合った。辰雄は多恵を三、四度軽井沢の犀星宅に連れて行ったりした。夏の終りの頃、矢野綾子の父透が、綾子の妹を連れて油屋旅館に辰雄を訪ねて来た。この折、辰雄は透達に多恵を紹介した。十一月、九月から着手していた「かげろふの日記」を書き上げ、七日に上京、國學院大學へ行き、折口信夫に初めて会い、十五日に信濃追分に戻る。川端康成の家で一泊し、翌十九日追分へ帰ってみると、油屋は消失していた。軽井沢の藤屋、つるやなどに滞在した後、二十六日、川端別荘に移り、十二月、二十日過ぎ、「死のかげの谷」を脱稿。同伴の野村英夫が帰京した後、暮れに神西清が訪れ、ここで正月を迎えた。「かげろふの日記」を「改造」に発表。

翌、一九三八・昭和十三年三十四歳。二月、加藤多恵と結婚することを決め、川端康成や神西清にその報告をするために鎌倉に出かけ、深田久弥宅に寄ろうとして途中で咯血、鎌倉額田病院に入院した。三月、下旬退院し、向島の自宅へ帰った後、加藤多恵の実家で静養。「死のかげの谷」を「新潮」に発表、これで綾子との〈恋・愛〉の物語を完成。

四月、十七日、室生犀星夫妻の媒酌で加藤多恵（大正二年七月三十日生まれ）と結婚。下旬、犀星別荘を借りて家探し、愛宕山の水源地

の近くに新居（軽井沢八三五）を定めた。『風立ちぬ』野田書房より刊行。五月、中旬、父が脳溢血で倒れ、夫人と二人で向島の家に行き看病する。七月、「幼年時代」を執筆開始。十月、下旬、軽井沢を引き上げ、逗子の山下三郎の別荘にしばらく落ち着いた。一二月一日、父上条松吉が死去。

以下、翌年からの結婚生活は、戦中、戦後を越えて、一九五三・昭和二十八年、五月、二六日より病状悪化し、二八日午前一時四十分、夫人多恵にみとられながら永眠。三〇日、信濃追分の自宅で仮葬。六月三日、東京芝の増上寺で川端康成が葬儀委員長となり、告別式を執行。三十年五月二十八日、多磨霊園の墓地に納骨された。

#### 堀辰雄作品

多恵子ものを中心にとどる。

昭和十二年一九三七

九月「閑古鳥」（「郭公」改題）

「もう三十にもなつた私は、或る七月の雨上りの夕方、あの部屋で私の書いた小説に出てくる私の少年時代の恋人は、私の知らない間に、結婚をして、さうして若い母になつて、しばらくして死んで行つたと云ふことを、私が聞き知つてからもう大ぶになる。自分の少年時の掛け換へのない恋人を失つたのであることを、胸が痛くなるほどはつきりと感じ出した。（中略）

われは死者をもてど、彼等をして去るがままにす……

これは、初恋の人、『甘栗』『麦藁帽子』に母志気の愛との葛藤の中  
でえがかれた、国文学教授内海弘藏の次女妙の消息である。その人の  
死が、次作『山茶花など』と併せて『生者と死者』とまとめられてい  
ることが注目される。十月「牧歌 恩地三保子嬢に」が、「しかしそ  
の一瞬の光景は僕には忘れたい印象を与えた一枚のセガンテイニば  
りの絵」「一枚の牧歌的な絵」と書かれ、「明朝はもうあなたはこの村  
からお帰りになる。そのときお父様へのお土産にと思つて、僕は一所  
懸命にせつせつと書いた」と〈恋・愛〉的であること、恩地三保子は  
萩原朔太郎の詩集『月に吠える』などの装幀でも知られる恩地幸四郎  
の娘で、多恵子の親友にして、二人連名宛の手紙も書いている。牧歌  
の絵の中に多恵子も三保子と住んでいる。

昭和十三年一九三八

一月『山茶花など』作中に「いまからこんな事ばかり考へてゐて、私  
はこれからどうしたら為合せしあはになれるのでせうか？」と質問する青春  
の悩める女人は、多恵子なのか、同時に交際していた中里恒子か。私  
は対談で伺つたが、中里さんと、きっぱり、夫人の答への声は、こ  
ころなし固かつた。事実、横浜の外人墓地、これは明らかに恒子の案  
内。二人見出した墓碑、「この人は私と同じ年で死んでゐるわ——」  
とジュリイ・P やすらふ。行年二十三歳、一八七二年三月六日歿す。  
ここでも「その夏〇村の墓地で私の考へつづけけてゐた数年前に死んだ

一人の若い女の面影、……さう、さう云へば、あいつが私の知らない  
男と結婚したのはやつぱり二十三ぐらゐの時だつたんだなあ……」と  
思いは妙に、そうして「今度来るときはジュリイさんに花を持つてき  
て上げたいわ」という女は恒子と想到できる。ここを訪ねた二人の文  
学者が墓の背後に「他の樹立のかけになりながら一本の山茶花がいく  
つかの目立たないやうな花をこつそり簇がらせてゐ」た、とある、そ  
の一本の山茶花を文学散歩で立ち寄つた私らも捜したのはいうまでも  
ない。

四月、『風立ちぬ』野田書房出版。六月、片山広子来訪。

風まじり雨ふる林に杉皮の家ぬれてゐたり君の家なるや

むすめらしくほそき姿のわかづまは黒き毛糸の上着をきたり

また釈迢空・折口信夫の朱の短冊（供養塔）が掲げられていた。

人も馬も道ゆきつかれ死ににけり旅寝かさなるほどのかそけさ

七月「卜居 津村信夫に」「全く一人つきりで、昔の自分にそっくり  
そのままの自分に返つて、心ゆくまで自分の青春に訣別を告げようと  
いふ陰謀」と書き、階下の部屋には、「女房に買つてもらつたトルス  
トイ全集だの、ジャック・シャルドヌヌの「祝婚歌」<sup>「ウェディングソング」</sup>や「クレエル」  
があり、「大いに結婚生活者の心理研究」とある。八月からの「七つ  
の手紙 或女友達に」（『山村雑記』改題）は、綾子との『美しい村』  
に見合う出逢いの物語の素材となる。

九月「初秋の浅間」「さういつた凄さを何処かその底にもつてゐる山

だが、その浅間も、追分の供養塔などの立ち並んだ村はづれ——北国街道と中山道との分か去れ——に立つて真白な花ざかりの蕎麦畑などの彼方に眺めやつてみると、いかにも穏かで、親しみ深く、毎日見慣れてゐる私の裡にまでそこはかとなない旅情を生ぜしめる。」とある。川端康成が長編隨筆「落花流水」「秋風高原」で堀の「初秋の浅間」を引く。

十一月、ユウジュエニイ・ド・ゲランの日記夫人と共訳、を「文体」「四季」に発表。

昭和十四年一九三九

一月『巢立ち』『或牧歌』と傍題。新婚生活を反映した最初の小説作品。「彼女は窓をあけた、さうすると、まるでさういふ彼女を待つてゐたかのやうに、小屋のすぐ傍らの大きな樅の木から、アカハラが一羽、うれしさうに啼きながら飛び下りてきて、その窓の下で餌をあさり出した。」「この山奥の村——去年彼と彼女とが其処ではじめて知り合つた——に二人が結婚して、一しよに暮らしにきたのは、もう一月ばかり前になる、六月のはじめだつた。丁度、アカシヤが花ざかりだつた。」と書き出される。ラストは、

この頃よく庭に落ちてゐる栗の花かなんぞだらうと思つてゐたら、それは、一ぴきの蚯蚓だつた。彼女が思はず両手で目を掩つてゐると、いつのまにか彼女の背後に突立つてゐた彼が、さういふ彼女の肩に手をかけながら、そつと彼女の耳に口をよせて、

「これが人生といふものさ……」とやさしく呟くのだつた。

これは夫婦愛の人生のすがたではあり、シャルドンヌ「祝婚歌」の撰取とともにその愛の形が形象化されている。「これが人生」の人生の新婚者には、酷薄ともいえる鎮魂の人に入った後の愛として。

五月『おもかげ』（『麦秋』改題）冒頭「アトリエとその中庭は、節子の死後、全く手入れもせず放つておかれたので、彼女が絵に描くために丹精して育てられてゐた、さまざま珍しい植木は、……」とあり、「が、さうやつて思ひがけないやうなところから光をあてられた、亡き人の様子の方が、弘なんぞが故人と共に聞き手の彼女をもいたはるやうに話してくれる姿よりも、かへつて生き生きとおもかげに立つて、一瞬彼女は胸がしめつけられるやうな気がする位だつた。」とある。弘は作家本人辰雄。「何もかもいいわ……」そんなことを言つてゐるさうな、夭折した人の絵姿が浮かんだ。「本当に私、ときどきいけなくなるわ」伸子は思ひ返した。」と。節子は『風立ちぬ』の節子にして綾子。伸子は多恵子。「自分にはこれから幸福に、でなくとも少くもこの人生を居心地よくさせてあげなければならぬ人があるのだ。そしてそれだけがまた自分を幸福にさせてくれるのだ。」と。作家の妻多恵子への論しの如し。

ラストは、

麦秋——もう一度、彼女はそんな言葉を口のなかに繰り返しながら、もう向うに見え出してゐる駅の前で、白い耳をかしげなが

ら、きよとんと坐つてゐる小犬と共に、こちらをぼんやりとして見てゐるらしい洋子の方へ、「マリアへのお告げ」をもつた方の手を快活さうにふつてみせた。

と閉じられる。洋子は綾子の妹良子。

この小説の受容史の一コマとして、対談への慚愧の思いで田宮虎彦の《亡妻もの》に関する堀多恵子から引き出した言葉を、しかし、今ここ、では、引いておく。

堀 そうですね、「おもかげ」についてはいろいろエピソードがあるんですけど、田宮虎彦さんの奥さん千代さん、あの方は私の友人なんです。大学時代の。

竹内 そうですか、田宮虎彦といえは《亡妻もの》で知られる。

堀 それで亡くなった後に『愛のかたみ』を出して、あの本の中に私と千代さんとやり取りした手紙が載っているんですね。

竹内 え、そう。僕は少年時代に北海道で姉の文庫から原田康子の『サビタの記憶』と一緒に読んだのが『愛のかたみ』です。その中に多恵子さんとの手紙のやり取りがあつたんですか。

堀 ええ、多分『愛のかたみ』だと思ふんです。それで「おもかげ」なんですけど、田宮千代さんがこれを読んで主人に手紙を書いたんです。その手紙があるかもしれない。捨ててしまったのかもしれない。（\*全集の書簡集にこれに当たる書簡はない。）そういうひどい小説を書くのはけしからんと、それでもう少し多恵子

さんのことを考えてあげなきゃいけないんじゃないか、ということを書いたんですよ。そんなこともあつて主人はあの作品をしばらく何にも載せませんでした。別に私はどうということもないんですよ。

以下、そこから『風立ちぬ』におよび、成城の家のことから、矢野透の葬儀と墓の世話をした話、

堀 その時お嬢さんの日記が出てきたんです。その日記を読んだとき、ああ知っていたんだなあと分かりました。

という重大な聞き取りに及んでいる。堀も上条松吉が養父であることを知っていた、少なくとも感知していたと私は考えたことだった。

一二月「美しかれ、悲しかれ」（旧友への手紙）改題 堀の佐多への思いを語る往復書簡については、すでに論じたことがある。

昭和十五年一九四〇

七月『姨捨』その結文は先に引いた。七月「木の十字架」。「私達が結婚祝ひに立原から貰つたクロア・ド・ボワ教会の少年達の歌やドビュッシーの歌のレコオドをはじめ聴いたのは、その翌年の春さきに、なんだかまるで夢みたいに彼が死んでいつてしまった後からだつた。」と記される。そうして、

九月『晩夏』（『野尻』改題）これは『おもかげ』に続く小説の第三作。「けさ急に思ひ立つて、軽井沢の山小屋を閉めて、野尻湖に来た。」と書きだされ「森の上には黒姫山が大きく立ちほだかつてゐる。その

左手に、やや遠くなつて見えるのは戸隠山だらう。ここは、本当に信濃路といふ感じだ。」と書かれる。そこに優れて酷薄な愛のかたみ、があつた。それは愛のイデーといつていい。

「Zweisamkeit……」そんな独逸語が本当に何年ぶりかで私の口を衝いて出た。——孤独の淋しさとはちがふ、が殆どそれと同種の、いはば差し向ひの淋しさと云つたやうなもの、そんなものだつて此の人生にはあらうぢやないか？

「さうだらう、ねえ、お前……」私は口の中でそんな事をつぶやくやうに言つて見た。

「何あに？」と、ひよつとしたら妻が私に追ひついて訊き返しはしないかしらと思つた。しかし妻にはそれが聞えよう筈もなく、私の少しあとから黙つてついて来るだけだつた。

昭和十六年一九四一

一月『朴の咲く頃』ラストは、

私はなかなか寝つかれないまま、けさ歩きまはつてゐたその谷やうに自分の持つて行き場所のない想ひをさまよはせてゐたが、そのうちにふいにそれが一つのものに落着いたやうに、その谷かげで見つけた朴の木の花が急に鮮やかに浮かんで来た。私はおもはず何かほつとしながら、その真白い、いい匂のする花でもつて自分のどうにもならない心をすつかり占めさせて行つた。

「どうにもならない心」から、〈恋・愛〉がひきだされる。

三月『菜穂子』を「中央公論」に発表。

昭和十七年一九四二

八月『花を持つてゐる女』「私はその日はじめて妻をつれて亡き母の墓まゐりに往つた。」と書き出される。「ずるぶん汚い寺で驚いたか。」私は妻のはうへふり返つて言つた。「元禄八年なんて書いてあるわ……」妻はそれにはすぐ返事をせずに、立ち止つて自分のかたはらにある古い墓の一つに目をやつてゐた。

ここには母志気と初恋の少女内海妙との〈恋・愛〉の相剋と同様に、結婚者多恵子との相克が潜んでいる。ここに全面的に生い立ちを巡る作家の生涯の帰結が継承されたのであつた。無論、妻多恵子は、堀の没後にも命を込めてその解明に当たつたのだつた。

昭和十八年一九四三

一月『ふるさとびと』は、今、ここ、の信濃追分が舞台、生涯の小説の最終作品。

一〇八月「大和路・信濃路」。連載随筆は「くれがた奈良に着いた。僕のためにとつておいてくれたのは、かなり奥まつた部屋で、なかなか落ちつけさうな部屋で好い。」とある手紙は、まさに妹背の〈恋・愛〉の形象化であり、多恵子の『妻への手紙』に後づけられた。

昭和十九年一九四四

一月「樹下」。二月下旬、森達郎を伴つて、疎開のための家を捜しに信濃追分に行き、帰京後咯血が続く。五月まで絶対安静、一時重態と

なる。六月、津村信夫死去。九月、信濃追分の油屋旅館の隣の家を借りて住む。

？月「炬辺」。「九月のなかば、約束の日限を二三日過ぎてから、蕎麦の花ざかりのなかを、三人ほどして戸隠に上つていった。」戸隠行き。三人は堀夫妻と日塔聡、『堀辰雄の周辺』で「孤高を貫いて生きた詩人／北海道での静かな生活」と掲げられる。津村はすでに下山、「その翌日山を下りて別所温泉の小さい宿に泊まった。日塔さんは背が高かったので蒲団から足が出てしまう。私はなんだか気の毒で、その辺にあった座布団を足の方に置くと、彼は足を縮めて困っていた。そんなたわいないことを覚えてる。」という多恵子の思いを思いとして私は受けとる。

昭和二十年一九四五

療養に専念した。日本の古典への関心と共に、新しい仕事への意欲を示す、とあるなかの、唐の詩人の「万事傷心在目前／一身憔悴对花眠」があった。

昭和二十一年一九四六

三月、「雪の上の足跡——高原の古駅における、二月の夕方の対話」を新潮に発表、小説が随筆かの論議を残すが、これが生涯の作品らしい作品の最後となった。月末、角川書店より刊行する『堀辰雄作品集』の打ち合わせのために上京し、帰って床についた。一月頃より健康思わしくなく、病臥。

昭和二十二年一九四七

四月「近況」(「追分より」改題)「この五月の末ごろの或る温かい日、家のものたちと裏の山へ榎の芽をとり<sup>た</sup>にいつて、つい気もちがいいまま、二三時間山で過ごした。」(傍点、堀)

\*

平成二十二年二〇一〇

堀多恵子、四月十六日夜、追分の家で永眠。「その夜から落葉松の葉のような雪が降りしきり、翌日は一面の銀世界でした。四月十七日は、夫である辰雄さんとの結婚記念日でもありました。」(岩崎信子編著『かるいさわいろ拾遺』)に、感慨は無量である。

\*私の最後となった面会

やはり、追分での講演の後だった。雑木林のお宅から出る私に眩くようにおっしゃった。

「竹内さん、私、来年で九十六歳よ、なんだか、このままで死ななような気がするの」

## 七 〈看取り〉の結婚者Ⅱ随筆家堀多恵子

堀多恵子作品

女性譜は〈恋・愛〉の双方性からしてそれぞれ女性の側からのアプローチがあるわけで、妻多恵子の表現が求められる。随筆家堀多恵子の成立、その最終が『雑木林のなかで』となった。たとえばその中の

「朴の花 深沢紅子さんへの感謝」(一九九三年八月「軽井沢高原文庫通信」)に、「野尻湖畔の荒れ果てた庭の草の中に咲くわすれな草を見付け、しゃがみこんでスケッチをしていらした容子が懐しく思い出されます。」と書き、「そうした可憐な花たちに心ひかれ、魅せられ画家となつて、沢山の美しい作品を残して下さいました。完璧な生涯に思えてきます。」と、その「完璧な生涯」は多恵子の問いであり願ひだったように思われる。深沢は『堀辰雄の周辺』に「野の花や清楚な女性を描いた画家 若い詩人たちのあこがれのひと」と掲げられた。「完璧な生涯」は理想の夫婦像、ここ追分のお隣の中軽井沢の美術館や盛岡の野の花の記念館を見てきた者として、多恵子の「生涯」の「完璧」が問われた。最初の随筆集は『葉鶏頭 辰雄のいる随筆』だった。戦後、最初の多恵子の堀の生前の随筆は、「タツオ・花・小鳥」に「いつだったか、主人の旧友ぬやま・ひろしさんが、『愛情の問題』という小さい本を私達に送って下さった。その中で夫婦、兄弟お互いを呼ぶのに、呼びすてにする楽しさをこんなふうにお書きになつていらつしやうた。」と書き出し、

『タツオ、もうねましようか』

などと言つてみたけれど、なかなか自分の声にならなくて、いつの間にかやめてしまった。今この文章を書こうとして、主人、堀、辰雄などと並べて考えていたら、こんな事を急に思い出して、ここではタツオと呼ぶことにした。(一九四九年十一月二十

日、初雪の日、追分にて)

と書く。堀の病を看護する日々にみせる茶目つ気のような明朗さ。「むかしの人」に油屋旅館の離れの生活の日々を描き、辰雄の子供の頃の回想から、

「おふくろが生きてたらば、僕はきつと黒襦子の衿かなんかかけた、清方<sup>きよかた</sup>好みの美人でも女房にしてただろうなあ」

と、私のすっかり田舎じみた姿をちらりと見ながら、そんな小憎らしいようなことを言つたりしたこともある。

とか、「この夏もまた、急に病気が悪くなつて、随分お友達の方々に御心配をおかけしてしまつた。こうした私の看護の生活ももう長い。私もいい加減度胸が出来てもよさそうな頃なのに、やっぱり少しでも容態が変わるものなら慌ててしまふ。自分の意気地のなさがほんとうに涙の出るほど情けなくなる。」と綴る(一九五〇年十二月十八日、信濃追分にて)。綴る文藻は、堀の目を通しているかと推測する。「葉鶏頭」では、「最近の「展望」誌上に富士見の療養所長の正木先生が「高原二十五年」という随筆を書いていらつしやいましたが、」と『風立ちぬ』『菜穂子』のサナトリウム生活に触れつつ、

私達の結婚生活もいつの間にか十四年の歳月がたち、その殆んど半ば以上を浅間山麓に籠もってしまったわけです。ここ五年ほど、辰雄はだいたい不調でずつと寝ついておりますが、それほど病気を苦にせず、いまだに病氣とたわむれているという風です。今

年はどうやら好調です。

この春頃

鶏頭の十四五本もありぬべし

という子規の句を本で読んで、これは好い句だと申し、それからいろいろ俳句のおもしろさなど聞かせてくれましたので、私もひとつその真似でもと思って、……

(一九五一年十月一日、信濃追分にて)

「ふるい日記より その二」には、七月二日(日) 雨。

鯛がうまく手に入ったので塩焼きにし、野菜の煮込みに辰雄さんの好きな茶碗むしを造り、二人で新築祝いをした。私は一人で赤玉葡萄酒を飲み、病人の床のそばで何かとこれからのことなどを話し、明るい一日を過ごした。

読書休む。

とある、これが堀生前の多恵子の最後の文章。没後の追悼に、「ふるさと」(一九五八年五月二三日、信濃追分にて)。

「おもかげ」。「私は今でも机に向って静かな気持で「風立ちぬ」を読むとき、自然に目頭があつくくなって来るのをどうすることも出来ません。」と書き出し、

辰雄は自分の生命を大切にしたい人、自分の生活を大切にしたいひと、芸術家として、小説家として自分を高め、深めて行くために自分に必要なものは努力して受け入れ、不必要なもの、肌合

わないものからは心して遠ざかった。そんな人だったと思うのです。だからいつも自分を孤独におくことに堪えられたのでしよう。

辰雄にとって自分というのは、辰雄自身と自分の愛する者を意味しているのではないでしょうか。(傍点竹内)

一九五九年一〇月、信濃追分にて

と記す多恵子は「自分の愛する者」だった。そう確信できた妻多恵子は幸福であった、それをして「生涯の完璧」を言えるかどうかは、やはり読者にゆだねられている。

『堀辰雄 妻への手紙』(一九五九・昭三四・新潮社)に「辰雄の思ひ出」二文。

「辰雄の手紙」の最後に、「この京都への旅は辰雄の生涯にとつての最後の旅となつてしまひました。……戦後文壇活動が盛んになつて来た頃、皆さんの仲間入りも出来なく、一人病床に呻吟してゐる辰雄を慰めて、「晴耕雨読を二人で分けあつて、晴耕は私が担当し、雨読の方はあなたが引き受けて、静かに此処でくらすやうにしませう。気長に元気になるまで日を待ちませう」と申しますと、辰雄は、「僕は元氣になつたら今度は京都に住んでみたいんだ。お前は東京でも追分でも好きな処に住めばいいよ。さうしたら毎日お前に手紙を書くことが出来るだらう。」「しかしそれは、もう思ふやうに仕事も出来ないと思つた時、手紙でも書けば仕事への段階ともなつてゆく、日頃の自分を考

へての、もつと切ないものであつたのかもしれないと、私は此頃になつて思ひはじめてゐます。」と結ぶ。

「辰雄の晩年」これは、

短夜の看とり給ふも縁えにしかな

こんな石橋秀野さんの句を見付けて、「女らしい、いい句だね」と言つたのはいつ頃だつたかしらと、ふつと考へてゐると、あとからあとからいろいろの事が思ひ出に浮んで来て、私は又自分自身をさいなむ気持ちになつてゐることに気づいて、あわてて考へをそらせてしまひたくなるのでした。

と書き出し、茅舎、秋桜子、虚子、芭蕉の

山路来て何やらゆかしすみれ草

に及び、

やがて五月には七回忌がめぐつて来ます。何んの不自由もない東京の生活の中で、あの厳しい寒さの追分に帰つてみたいと思ふのは、何も大昔のひとびとのやうに死者の霊が山に棲むと信じるわけでもないのですが、あの「雪の野を赤あかと赫かせながら山のかなたに落ちてゆかうとする日」を見たいと思ふからなので

と結んでいる。中途の堀臨終の看取りの瀬戸際の引用は、あえて控

えさせていただく。『風立ちぬ』の「私」である堀が十二月七日で綾

子の臨終の八日、一日を省筆したのに、どこか做う気持ちもある。

以上、多恵子夫人その人の文学世界が垣間見えて興味深い。そこから照応する堀作品を論ずることも求められるが、別の機会に委ねる。

## 八 生きることは文学すること

### ／文学することは生きること

室生犀星から

堀とその文学を見守る代表的な文学者は室生犀星だった。そのいくつか、

「日録」(大一二・二〇「改造」)

七日、堀辰雄君来る。本所なれば母を亡くせしといふ。十九の美青年この一夜にして二十一二歳に見ゆ。ともに涙なくして語るべからず。

同十月十九日付書簡

手紙を見て君にやはりお母さんが居られたらいいと考へてゐる。とにかく学校はやりたまへ、そのうちこちらへ出かけて来たまへ、

全集所収最初の来簡、金沢市上本多町川御亭三十一より、東京市外葛飾本田村大字四ツ木二七八、上篠方宛

『母』(大一一三・五「女性」『新選室生犀星集』)

これは、堀からの聞き書きの告白体。

いまから考へると何が何やら一切夢のやうな気がします。だい

いち母があんなに惨たらしく死んだかどうかさへ私にはまだ信じられないのです。……医者の話ではこんどの震災では非常に病人が多くなつたと言ひますが、そのうちでも精神系統の発作的な疾患が多いと言つたが、あなたのお父さんのはそんなに心配したほどのものではない、

とあり、「それでなくとも此頃の私は妙に父に似た或る心持ちをだんだんに踏んで行くやうで怖いのです。父の考へてゐることは別ですが、父と同じ日常を送る私がだんだんに父に近い心持ちを継いだり、知らず知らず模倣することはどうしても免れません。私はそれだけが恐ろしいのでございます。」と閉じられる。

位牌の裏書き「震なわが母を見わけぬうらみかな」の記述もいたわしい。

『うつくしからざればかなしからんに』扉書きに

これは作者のなかの一等うつくしいものにつけた愉しく哀しい、にじみでる人と人を現した作品、結局、私といふ作家はいつも此処までまひもどつて、静かに息を凝らしてゐるやうなしほらしさが何時もほしいのではなからうか。

とある劈頭の小説、

『信濃』(昭一五・二「改造」)

モデルは、野木＝室生犀屋 泉辰太＝堀辰雄 あや子＝矢野綾子

小説＝『風立ちぬ』

あや子からいへば一生に一度しかないやうな日々の愉しさが、そのまま死へのみやげになるやうな日々であつたのだ。……かういふ生活のあひだにねばり強く生きて行かふとした泉は、誰も生きられぬところを生き抜いた男ではなかつたらうか。

とあり、「わたくしも愉しいわ。」は『風立ちぬ』の一節から。「古い年代の艶をいたるところの木地に見せた宿屋」とはあぶら屋。原道夫＝立原道造 鈴木＝水戸部アサイ 津川＝津村信夫 長野＝小川昌子 今治大佐＝矢野透

綾子の父の「このころ泉さんがつれて歩いてゐる玳子さんといふ人をあなたはどう思ひますかね。」の玳子＝加藤多恵子。「あや子も大変可愛がつて貰ひましたから、それに、わたしがお世話をする事になればあや子もきつと喜んでくれますよ。」という言葉は、堀の『おもかげ』にも使われた。「人情といふものの生え抜きの美しさを泉辰太によつて、余りにも鮮かに見せられたのが、」とか、「野木さんわたしもこれであや子の心をかなへてやる事が出来ましたよ」と多恵子の結婚が導かれる。立原の病床を見舞つての「この少女の顔には原と一緒にどこへでもついてゆくといふ固い決意と、極端につかれた黄ばんでゐるものが得もいはれぬ優しい色さへ見せてゐた。」とは、津村信夫と江古田の病院を見舞つての「一等うつくしいもの」「愉しく哀しい、にじみでる人と人を現はした」もの(『うつくしからざればかなしからんに』(昭一五・六)扉書き)だった。

「日記」昭和二十八年

五月二十八日 堀辰雄死す。朝子をやることにし出立。……朝日新聞に堀の死亡報告が出てゐたが、少し派手だ、何かの便宜によるものか、文芸春秋社でやつてくれたのかも知れない、ラジオの録音放送もあり堀の死は堀のふだんにくらべて華やかである。しかし追分村のと葬らひは、身についたしたしいものであつたらう。

「悼詞」(昭二八・八「文芸」)

堀君、君こそは生きて生きぬいた人ではなからうか、一日の命のあたひをていねいに手のうへにならべて、働はりなでさすつて、けふも生きてゐたといふふうに、命のありかを見守つてゐた人でなからうか。……君危しといはれてから、三年経ち、五年経ち、十年経つても、君は一種の勇氣をもつて生きつづけて来た、

『我が愛する詩人の伝記』

「堀辰雄」

病床十年を切り抜けたところで夫の死を見た彼女は、烈婦のカガミのような人であつた。カガミはいまは辰雄の小説の中から美しい嫉妬をほじくり出して、それを唇にくわえて遊泳していた。……そういう堀は愛している人にも、つまり半分言つてあと半分を察してもらつていたのであろうか、愛しているのか、愛してないのか、もうろうたるものもあつたとしたら、それはたえ子夫

人によく聴いてみないと判らないことである。堀は誰にでもほれていた、誰にでもほれるということは男の素直さによるものであつた。だが誰にでも口説いてみるということをしなほれ方は、男であるための美しい徳であつた。

とは、この際、「堀辰雄／看取りの結婚者」の論題に応えた、「信濃路にみる〈恋・愛〉のメモリ」の証言ともなるうか。

それにしてもたえ子夫人の看取りがなかつたら、堀はあんなに永く生きていられなかつたであろうというのは、あとに残つた私どもが彼女におくる褒め言葉だったのである。彼女はそんな褒め言葉なぞいらないと言うだろうが、横を向かないで受けとつてほしいのである。

今ここに、に！ 犀星の多恵子評は、峻烈にして大悲、慈愛。我が愛する詩人「堀辰雄」の掉尾であるとは！。

付 宮崎駿製作アニメーション映画『風立ちぬ』の構図

堀越二郎×堀辰雄

東京(下町・上野広小路・代々木上原・成城)

軽井沢高原・万平ホテル・富士見高原療養所・名古屋製作所

ロマン・飛行機／文学

大震災・世界戦争・結核

菜穂子＋節子

〈恋・愛〉のメモリー。雪中、結核療養所を出奔した里見菜穂子、堀越二郎と製作所上司・黒川夫妻のはからいで結婚式をあげ黒川邸の別室で新婚の生活、だが、死を覚悟した菜穂子、置き手紙を残して一人療養所に立ち戻る。

生きて！

それは死にゆく節子+菜穂子の究極の叫び、看取られたものの看取ったものへの遺言、愛の詞章。「生きて！」という女の声は、看取った男に託された(男は飛行機製作所にあつて不在だが)、『風立ちぬ』の生と死の声が、現代において生の声をより強く響かせている。ここで節子が菜穂子と呼ばれ、『菜穂子』の片山広子・総子母子へのロマンに結ぶとき、信濃路の〈恋・愛〉のメモリーは、全き綜合への路を得ることになる。

### 結 うつつのカガミ(鏡・鑑)、或いは論の帰趨

作品論の試み——それがこの世にあつて、出逢つた師の一人、三好行雄の論題であつた。これを逆縁ながら、私は、作品論は、最終、作品であらねばならない——と想を發して、出版したのが処女出版『堀辰雄の文学』であつた。

「文学研究において、窮極作品論しかなく、文学史を想定するとしても、作品論↓文学史であつて、その間に入るものとして芸術論、風土論その多があるだけである。」と年譜↓作家論を避けようとしたス

トイシズムは、さすがに今はないが、ここ文学記念館でお示した資料は、いわば作品論のために用意した創作ノートであつて、今、ここ、から論題の作品論を試みなければならないのだ。

Aニメ『風立ちぬ』で制作者宮崎駿らがあらわしたものは堀辰雄文学の受容の一つの典型である。

堀多恵子において著された文学の受容を、信濃路の〈恋・愛〉のメモリーとして受容し返した私の作品論は、堀の代表作『聖家族』と『菜穂子』の間に『風立ちぬ』を構えたロマンに、生きて！の願いを差し挟んでの、堀文学に自らも対峙しつつ、それには半世紀の生前、没後の自らの生涯を注ぎ込んだ文学への未来への参与であつて、さきわいであつた。そのための文学記念館であつたといえは、おちにすぎるだろうか。

節子+菜穂子の間にあるもろもろの女性譜を、犀星の言葉をかりれば「烈婦のカガミ」は夫の小説の中から「美しい嫉妬」をくわえて夢とうつつの間を遊泳した、堀の師の一人犀星亡き後も、生きて九十七歳を閲した多恵子夫人は夫人という立場をかなぐり捨てて、随筆家として著作をかさねて、辰雄—多恵子の文学世界を、今、ここに現している。

へ思へば伊勢と三輪の神。思へば伊勢と三輪の神。一体分身乃御事今更何と磐座や。その関の戸乃夜も明け。かくありがたき

夢の告<sup>ツゲ</sup>。覚<sup>サ</sup>むるや名残なるらん覚<sup>サ</sup>むるや名残なるらん

謡「三輪」のキリ。シテの謡う伊勢の天照と三輪の明神は本体は同一、磐座<sup>いわくら</sup>や「かくありがたき夢の告」、夢の告げは名残をのこして、ありがたくも、論ずる者の〈恋・愛〉の御座を守る。夢かうつつか、うつつは夢か。現の今、ここ、千葉野の住み家で、論の結びを尽くそうとする。

日本における近・現代の恋愛の「磐座」は、近代以降の即位の正殿の儀が、天皇・皇后二つ並べた座であることに則っている。これも一つのめおと（夫婦）カカミ（鏡・鑑）、妹背<sup>いもせ</sup>の〈恋・愛〉のかがみと なった。

覚<sup>サ</sup>むる名残に、本稿を結ぶ。まさに令和元年十月二十二日、令和天皇即位の高御座<sup>たかみくら</sup>・正殿の儀が執り行われた。伊勢と大和の祖霊への即位のご挨拶、報告に赴かれる。

多恵子、結婚して十五年、辰雄歿して五十八年を生きて、九十七年の生涯は、やはり見事であったと讃えるばかりである。その間の愛別離苦の修羅はまた別様に語られる。近現代のうつつのリアリズムは、今、ここ、の先にメモリとして語られる。

——日本文学持ち歩き（八）——

十月三十日 摺筆

講演原稿（於・追分公民館 令和元年二〇一九・二〇・二六）を改めた。

キーワード 信濃路 恋・愛 堀辰雄 看取り 結婚者